

ミシェル・フーコーにおける「文明」の positivité について

中川 久嗣

フーコーの思想

フーコーの思想を、ひと言ですべて総括することは容易なことではない。彼の生涯の思索は、その著作群の扱うさまざまな主題を一瞥するだけでも、それがいかに現代文明の、多岐にわたる、しかもユニークな諸領域を対象としているかが理解できよう。初期には臨床医学や精神医学の問題、そのうち人間の思考の形式や真理といわれるものに関する哲学的問題、そして権力システムの分析をへて、最後期には性の問題にいたっているのである。

しかし、このようなフーコーの思想の多様な全体像を理解・説明するために、しばしば「知・権力・自己」という言葉が用いられている。この言葉に即してフーコーの思想をある程度たどってゆくことは可能である。初期の『臨床医学の誕生』『狂気の歴史』『言葉と物』は人間の知、とりわけ近代ヨーロッパの知が、いったいどのようなパラダイムにおいて、さらにどのような歴史的プロセス（あるいは非連続）の中で成立したのか、また、そうした近代の知に固有な諸形式とはどのようなものなのか、といった分析が行なわれる。近代的主体あるいは近代的理性といわれるもの

が、はたしてどのように「病人」や「狂気」を他者として同定し、理性的まなざしの対象として確定し、分析し、そうすることで、理性みずからと、自分自身の秩序づけられた言説（ディスクール）とを確立していったのか、が問題とされた。

中期にあたる『監視すること—監獄の誕生—』では、そのような近代理性の知のシステムが、現実の社会的ポリティクス領域で、どのように「実践」に移され、社会の権力システムの論理的基盤を形成しているのか、が明らかにされる。近代の監視・処罰機構は、同じく近代のエピステーメーの論理システムと表裏をなしているものにほかならない。

後期の『性の歴史』やさまざまな講義・講演・インタビュー等でフーコーがおこなったことは、それまでのすべての仕事を、人間の「自己」との関わりをとおしてまとめ上げることであった。人間の「知」すなわち「真理」の問題も、その社会的実践の領域である「権力」の問題も、すべて、人間がみずからを「自己」という主体に昇華させてゆくこととの深い関わりなしには、語り

えないものであるとされる。『性の歴史』では、西欧のセクシュエアリティーと倫理道德意識の関わりが、歴史的に「主体としての自己」の形成過程と不可分なものであることが、語られている。このようなフーコーの思想を、フーコー自身が『真理・権力・自己』の中で次のように説明している。

「わたしが研究してきたのは次の三つの伝統的な問題です。

①学問の知をおして真理にたいして、また、文明のなかでかくも重要なものであり、われわれがそこでは主体でもあり客体でもあるあの『真理のゲーム』にたいして、われわれがもつ関連とはどのようなものなのか？ ②あのさまざまな奇妙な戦略ならびに権力関係をおして他者にたいして、われわれがもつ関係とはどのようなものなのか？ そして③真理と権力と自己とのあいだの関係とはどのようなものなのか？」
（『自己のテクノロジー』所収。田村俣、雲和子訳、岩波書店、一九九〇年、十二頁。）

ここでさしあたって指摘しておかなければならないのは、フーコーは、みずからの全思想を、主体としての「自己」への問題関心によって総括していることである。ヨーロッパ文明がヨーロッパ文明として、これまで長い歴史の中で生み出し、育んできた「自己」に対する、フーコーの思想的問題関心、あるいは哲学的反省作業（クリティック）とは、言葉をかえるならば、フーコーが所

属するヨーロッパ文明それ自体に対するフーコー自身の哲学的・思想的反省作業なのである。ヨーロッパの伝統的な「主体としての自己」に対するフーコーの検証は、同時に、ヨーロッパ文明自身への自己検証という意味合いを持つものなのである。

文明の実定性（ポジティヴィテ positivité）

フーコーは、思想家・哲学者でありながら、歴史（考古学）的手法を用いてさまざまな著作を著したが、同じ歴史学的著作家であるシュベンングラーやトインビーのように、はつきりと「文明」というものを主要な概念装置として設定し、これを全面的に論じたというわけではない。しかし、先に述べたように、フーコーの思想は全体として、ヨーロッパ文明そのものの在り方を問題とするものである。したがって、彼の思想の具体的な内容を追うことによって、フーコーが文明をどのようなものとして扱っているか、ということを考えることは可能であると思われる。

さて、フーコーは、『言語表現の秩序』と題された著作のなかにおいて、言説 *discours* を、その「肯定の力」の中で捉えようとする自らの「系譜学的」分析について説明しながら、この「肯定の力」を「否定する力に対立するようなものではなく、それについて真なる命題や虚偽の命題を肯定したり否定したりすることのことができる、対象領域を構成する力」であるとし、さらにこれらの対象領域のことを「実定性」と呼んでいる（中村雄二郎訳、河出書房新社、一九八一年、七一頁）。「実定性」とはポジティヴィテ

positivité の訳語であり、これは従来は社会科学や自然科学的な意味での「実証性」という意味を持ち、またあるいは肯定的・積極的であることを表す場合にも用いられる。フーコーの場合は、まずなによりも、言説が生成、展開、定着するような思考の「場」に対して用いられていると普通考えられている。例えば『言葉と物』は、フーコー自身の言葉によれば、「どのような歴史的〈ヘア・プリアオリ〉を下地とし、どのような実定性の本領内で、観念があらわれ、学問が構成され、経験が哲学として反省され、合理性が形成されるということが可能だったのか、そのようなことをあらためて見きわめようとする研究」であった（『言葉と物—人文科学の考古学—』渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、一九七四年、二十頁）。

さまざまなエピステマー（認識の諸地平）はそれぞれ「みずから固有のポジティヴィテ」（同書、三九三頁）を持ち、われわれ人間は、そうした認識論的空間の中でポジティヴ（実定的）な認識を行なう。フーコーにとって、ポジティヴィテ（実定性）とは一つの思考なり言説なりが、われわれにとって何らかの「力」を現出させることが可能となる諸領域なのであって、思考の歴史においては、それがどのようなエピステマーの形式によるにせよ、そのエピステマーそれぞれの思考と言説の、作用と働きの力の間であったのである。

『精神医学の誕生』『狂気の歴史』『言葉と物』さらに『知の考古学』や『監視することと処罰すること—監獄の誕生—』などで、

ヨーロッパ文明の自己検証のためにフーコーがおこなったことは、ヨーロッパ文明におけるさまざまな時代（なかでもとりわけ、われわれの現在を形作るところの近代と呼ばれる時代）の認識論的領域を、いろいろなエピステマーの生起する実定的な場として捉え、そのエピステマーの中で、どのような思考が現われ、展開され、世界認識を遂行し、また真理の諸形式をつかさどり、ついに社会的実践に移されることとなったのか、これを明らかにすることであった。

このように、方法論という点から見れば、フーコーにとって、文明とは実定的（ポジティヴ）なものである。言説分析をその主要な課題とするフーコーのエピステモロジーにとって、文明とは、言説（ディスクール）が生起し、根をはり、展開される、実定的な場、なのである。文明の実定性は、思考に、そしてその文明自身に、みずからの認識論的基盤を与え、固有の付置を与え、そして力を与えるものである。最初に述べた、フーコーの思想を要約すると言われている三つのモメント「知・権力・自己」の分析は、何よりも文明の実定性において可能なものとなるのである。

フーコーの西洋近代文明批判

以上のような方法を用いて、フーコーは西洋近代文明についての分析を進めるのであるが、それによれば、西洋近代文明に固有な知の形式の、主要な特徴の一つとは、同一的自己意識がその論理的主体となり、全体を支えるところの、秩序と連続性に貫かれ

た合理主義的思考システムである。秩序と連続性がどこまでも世界を貫徹し、この合理的体系を、例えば数学のような、やはり秩序と連続性に基づく合理主義的思考で把握しようとするかぎり、われわれは世界をあますところなく認識できるし、また、世界（自然）のコントロール（加工、管理、支配、改造等）も可能であるはずである。そしてかかる合理主義的思考でもって世界の客観的真理を遂行する能力を、認識主体である「自己」は、ア・プリオリに備えているのだ、という信念である。近代の「私」は一人一人理性を持つ存在であり、この理性を行使するかぎり、「私」は真理に到達し、正しい行為を実践し、自然の支配制御が可能である。かくして、近代の主体は、その理性のおかげで、絶大で至上の力（認識と実践の力）を獲得し、近代文明を作り上げる。

しかしながら、このような近代の主体である「私」による思考のシステムの有効性、あるいは「普遍妥当性」は、その起源を「ア・プリオリ」のかあなたに祭り上げてしまったために、一方で「私」以外の他のもの（無知蒙昧や非合理的思考）に左右されることがないという利点と力を得ることができたが、他方で、きわめて独善的・自己中心的世界を作り上げてしまう危険を抱え込んでしまったのであった。例えば極端な例ではあるけれども、「ユダヤ民族は劣等人種であり、撲滅されるべきだ」と、近代の「私」がいったん合理的に判断しさえすれば、その「私」にとって、それが「真理」となってしまおうのである。そしてその「真理」を実現すべく、合理的な知とテクノロジーによって実践が行なわれる

こととなる。近代の知は、それが秩序と連続性を志向する合理主義的な思考となればなるほど、そこから「価値」や「意味」や「目的性」といった人間の要素が排除されてゆき、自然や世界や他者の支配のための「道具」と化してしまふ。「道具」それ自体はどこまでもニュートラルで、合理的で、没価値的なシステムであるが、それだけに、それを用いる仕方、言わばどうにでもなってしまうであろう。近代のシステム全体の論理的主体である自己が、理性の主体であると同時に、「自己保存」の原理によって行動するものであるという事実を忘れてはならない。秩序と連続性を志向する近代の知やテクノロジーが、自己保存の原理によって発動される時、文明が野蛮へと転落する契機が出現するのである。

フーコーは、このような近代の知が、いかに秩序志向的であるか、いかに主体としての自己を中心として成立しているか、そしていかにそれが、見かけ上とは裏腹に、絶対的な正当性や客観的妥当性を持っていないものなのか（つまりいかにそれが相対的なものであるのか）、といったことを示して見せるのである。

理念としての「文明」の positivité

フーコーの西洋文明批判の一端は、今見たようなものであるが、この批判は西洋文明それ自体の廃棄を目指したもので決して決していないことに留意しなければならない。フーコーは次のように述べている。

「いまやわれわれが、起源、最初の構成、目的論的地平、時間的連続性、などの問題を提出するのは、まさにこの理性に對してであり——そしてわれわれは決してそれを放棄しない決心である。」(『知の考古学』中村雄二郎訳、河出書房新社、三〇五頁)

「現代の政治的、民族的、社会的、哲学的課題は、国家および国家の諸制度からの個人の解放ではなく、国家と、国家に結合した個人化の型の双方からわれわれを解放することである、ということを経験としたい。われわれは、数世紀にわたって強いられてきたこの種の個人性を拒否し、主体性の新しい形式を育成してゆかねばならないのである。」(『主体と権力』渥海和久訳、思想、岩波書店、七一八号、二四一〜二四二頁)

フーコーの西洋文明批判、あるいはフーコーによる西洋文明自身の自己反省は、文明の廃棄をその眼目とするものではなく、われわれの文明はどのようなものであったのか、そしてそれではいったいそれはどのようなものであるべきなのか、ということの問題にしようとする動機に裏打ちされているのである。

そもそも批判(クリティック)や反省には、何らかの動機(こう言うてよければ倫理的動機)と向かうべき方向性とが不可欠である。動機や方向性を欠いた文明批判は不毛であるばかりか、と

もすれば混乱やカオスを招来する危険を持つ。そこで、われわれの批判や自己反省が持つべき動機や方向性はといえば、フーコーによれば、やはり「理性」的な領域にその起源を持ち、その領域の中において模索されなければならないものである。そのような意味で、フーコーは理性や主体性の理念を廃棄せず、より望ましい形式を模索しながらも、これらを保持し続けようというのである。

われわれは文明を批判し、反省することで、「反・文明」や「野蛮」を志向することは出来ない。われわれは文明を反省することによって、しかしなおかつ文明を目指さなければならないであろう。文明があくまでもやはりわれわれの反省の目指すべき理念的目標である、という意味において、フーコーにとって、文明とはポジティブ、すなわちこの言葉の持つ第二の意味である、「積極的、肯定的」なものである。われわれが普通「文明」という言葉や概念を用いる場合、「野蛮」や「未開」に對して、意識的にせよ無意識的にせよ、つねにそこに何らかの「プラス」の観念、すなわちポジティブな意味合いを包含させて考えている。われわれは「文明」についての反省を行ないつつも、「文明」の持つプラスの、積極的・肯定的ベクトルをそこから受け取らなければならない。理念としての文明のポジティブティは、われわれの反省の基本的な動機や方向づけを与えてくれるものである。

まとめ

フーコーにとって「文明」とは、方法論的には、彼のエビステモロジーの対象そのものであり、そしてそれがもっぱら思考や言説の生起する場として捉えられている、という意味でポジティヴ（実定的）なものである。しかし同時に、自己反省や自己検証をおおして、われわれがあくまでも目指してゆくべき理念的対象（目標・目的）である、という意味でもまた、ポジティヴ（肯定的・積極的）なものである。われわれの文明は、それがどこまでも文明として在り続ける為には、自己反省が不可欠である。自己反省を欠いた文明には、野蛮への転落が不可避である。かくして最後にフーコーの西洋文明批判は、このような意味でもまた、一つの「文明学」としてポジティヴなものだと言いうことができるであらう。